(3) 聖書的真理と伝統から派生する困難な諸問題との関係をどう処理すべきか。これは残された課題のように思われる。　(小野一郎)

Massey Hamilton Shephered, The Eucharist and Liturgical Renewal, New York, Oxford University Press, 1960, 146 pp.

この論文集は，1960年，米国のサン・アントニオの，聖パウロ教会で開かれたリタージカル・ムーヴメントの会議における講演を収録したもので，編者は米国聖公会の礼拝学の権威の一人であるマセイ・H・シェパード司祭である。編者が序文の中で語っているように，この書物は，1958年開催の同趣旨の会議の結果，出版された「教会と礼拝復興」(オックスフォード大学版，1960年)に続くものである。

さて，この書物は左記の如く一つの説教と，六つの講演とを収めている。

1. 聖餐式と教会
2. 聖餐式と聖書
3. 聖餐式と教育
4. 聖餐式の経済的，社会的意義
5. リタージカル・ムーヴメントと信徒の職務
6. 礼拝復興と正教会
7. 聖餐式と生活，——説教

1. 聖餐式と教会

(著者は，世界聖公会の宣教主事であったベイン主教である。)

聖餐式を教会の行う一つの礼拝と考える事は間違いである。ユーカリスト（感謝式）と言う言葉の意味が示す様に，それは，クリスチャンの生き方それ自体である。それ故，米国聖公会で論議されている早祷式と，聖餐式とどちらが良いかという様な問題は，無知によるものと言わねばならない。同様の無知が，聖餐式の理解について，二つの意見の対立させている。即ち，一つは，聖餐式を，十字架の犠牲という歴史的事実への，主観的な想起に中心をおいて考え，他は，時空を超えて働く神の行為を重視し，聖餐式の聖品における神の行為，臨在の客観的真実を主張するのである。この二つの立場は，互に他を批判して，聖餐式を，単に主観的な追憶にしてしまうと言い，或はサクラメントを魔術化すると言う。しかしこれは，神の働きを，歴史的時間のうちに見る精神と，歴史を超えた永遠性においてみる精神との内的闘争なのである。聖餐式は本来，キリストから支えられた一致と交りの中心的な場である。時と永遠の課題は，インカーネーションを通し，この聖餐式に於て，真実の出会いの場をもっと言われねばならない。即ち，聖餐式は，永遠なる神の行為が現実のうちに現わされることなのである。教会が神の永遠の働きの，歴史的現実におけるあらわれである如く，聖餐式は教会の礼拝と，教会の生活との，普遍的な型と言われねばならない。

2. 聖餐式と聖書

（南西神学院の，ヘブル語と旧約のジョン・M・ホルト司祭が著者である。）

さて，クリスチャン・ライフは，神の恵みと人間との応答である。この応答は，三つに分けることが出来る。即ち，儀式的，神学的，倫理的の三者である。そうして，聖書と聖餐式とは，両者共に，同じカテゴリーで考えられるものである。聖書が，多分に現代生活の中で適応されず，真実に理解されぬ様に，聖餐式もまた，何か特殊な行為とされているかもしれない。しかし，聖書は，神と人間との応答として，先の三者を内容として持つものであり，比較的に語るなら，儀式的内容を盛るレビ記とか，また礼拝によく用いられるものとして申命記，共観福音書があり，主として神学的思想を語る第2イザヤ，ロマ書，またヘブル書がある。また，特に倫理的なアモス，エレミヤ，そして，ヤコブ書のごときがある。しかし，聖書は，全体として一つの聖書として大切である事は言をまたない。同様にして，聖餐式も亦，奉献や陪餐の犠式的行為だけが重大なのではない。祈りの言葉のもつ神学は，教会の信仰を支え励ますものであり，また，その倫理的内容は，ただ十誡や，キリストの愛の誡め，また説教にあるだけでなく，例えば，全公会の祈りに祈られる社会的責任，政治と経済の全体にわたる倫理的態度を見逃してはならない。聖書と同じく全体として一つの聖餐式が重要なのであり，聖餐式と言う時，我々は実際に，聖餐式中心の生活という事を語っているのである。聖書と聖餐式とはこうした意味で互に調和し一致するのである。聖餐式のある生活こそ，我々が聖書的意味において，神の恵みに正しく応えることと言われるのである。

3. 聖餐式と教育

（これはジェネラル神学校の牧会学，宗教々育の，ドーラ・チャプリン女史の講演である。）

教育は，神のなし給うものである。何か，神への信仰を教育する新しい方法という様なものがあると考えてはならない。神のみが神の御業をなし得たもうとすれば，教育もまた，神がその御業をなし給う場において行なわれなければならない。その場とは即ち聖餐式なのである。公会教育のカリキュラムとも言われる公会問答も，教会生活入門であると共に，聖餐式の入門でもある。聖アウグスティヌスが語る様に，人はその生涯を，聖餐式の中に聖書と共に過すべきなのである。歴史的に言って，トレント会議以前に，教会の教育は，見たり聞いたりする事を通して行なわれ，その中心は聖餐式であった。教会はその教育を語る時，知識だけで満足してはならない。学ぶ所が，行為となるべきである。キリストを学ぶことは，聖餐式に自から参加することと言われねばならない。主イエスが，パンをとり，祝福してさかれたとき，目が開けてそれがイエスである事がわかったと聖書にある。それが，キリスト教々育である。

聖餐式は，教育の過程，手段ではなく，すべてのキリスト教々育の中心であり本質である。聖餐式に学ぶことは，洗礼，堅信後の公会教育の重要な点でもある。祭壇において，我々は，如何に教えるかを学ぶと共に，神自からがその教育の働きをなし給う所の，神の恵みをうけるのである。聖餐式は，いわば教会に於てなされるすべての教育の目的それ自身である。

4. 聖餐式の経済的・社会的意義

（南部大学の，倫理・宗教哲学教授，ウィルフォード・クロス司祭の講演）

我々はここで，聖餐式から，何かクリスチャンの生活の倫理を引き出そうとしているのではなく，聖餐式の事実が，経済的，社会的にもっている意義を見出そうとしているのである。リタージカル・ムーヴメントは，聖餐式が，そしてまた教会がもつ社会的性格を我々に明らかにしてきた。キリスト教は，個人的，敬虔主義的なものでなく，共同的，社会的なものである。パンが一つである如く，人類もまた一つである。

聖餐式のもつ経済的，倫理的原則の第1は，人間は，社会的秩序の中にいるのであって，社会的混沌の中にあるのではないと言う事である。即ち，聖餐式の原則の中には，弱肉強食という社会的ダーヴィニズムはありえない。と同時に，その反対の極として，現代の組織的人間と言われる様な，全体主義の思想も否定されるのである。聖餐式は，社会性を強調する。しかしそれは，個々人が「我信ず」と告白する人間の共同体としての社会であり，個々人が，「汝のために」と与えられるキリストの身体を受けてつくるキリストの神秘体としての社会である。聖餐式は，一方では全体主義的，マルクス主義的，社会主義的な統制主義を否定し，他方非社会的，弱肉強食的，適者生存的な資本主義のもつ個人主義に反対するのである。

特に，聖餐式に於て強調されるべきものは，「創造のリタジー」としての奉献である。

聖餐式におけるパンとぶどう酒の奉献は，人間社会の中の社会人の奉献であり，産業社会における産業の奉献である。献げられるパンの中に，我々は現代産業のあらゆる騒音を聞きとる事が出来る。ここでは，人類全体が，世界の聖餐の祭壇で献げる神の祭司である。ここでは聖餐式は，世界の隅々で，絶え間なく行なわれているという事が出来る。クリスチャンはこうして，人間社会の全体を，ユーカリスト的社会へと創りかえるべく召されているのである。

5. リタージカル・ムーヴメントと信徒の職務

（これは，シカゴの通信販売百貨店シーヤース，ローバックの宣伝部員として，一人の信徒であるF・S・セリーヤー氏の論文である。）

さて教会が，救い主の命令に忠実であるなら，自からを宣教のためにささげるはずである。教会は，なるほど一方に於ては，聖貪的な原理によって，この世の教会という組織，制度を必要とする。しかし，この世の教会が存在する根本理由は，この世において宣教という果すべき職務があるからである。宣教の教会には四つの職位がある。完全な教会論では，執事，司祭，主教，そして信徒職の四聖伝位がある。信徒は，この世にあって，宣教すべく，信徒職に召されている。宣教は，聖霊の力によってのみ果す事が出来る。教会が聖霊の力をうける唯一の道は，神を礼拝する事である。即ち，聖餐式という最高の行為によって，教会はイエス・キリストと一体になって，宣教への活力を受けるのである。

ところが，信徒として困ることは，その大部分が霊的に文盲である事である。宣教の場にありながら，その使命を果す実力をもっていない。そんな義務をもっていることさえ知らないのである。それ故，信徒に仕えるべく召されている聖職は，信徒のこの世における

職務についてもっとはっきり示すべき事を要求されている。セールスマンが，自分の扱っている品物をよく知っている如く，教会の一員としてこの世にある信徒は，教会とは本来何かと言う事を，充分に知るべく教育されたいのである。

6. 礼拝復興と正教会

（著者は，聖ブラデミール正教会神学校の，教会史及び礼拝学教授の，アレクサンダー・シュメマン司祭である。）

西方教会のリタージカル・ムーヴメントは，東方教会では歴史的に当然の事とされているような幾つかの原理，原則の再発見と言える。その第1は，礼拝の共同性，全体性と言う事であろう。聖餐式に於ける最も重要な契機は何か，という問いに対して，答えは，聖餐式全体であると言われねばならない。聖餐式は全体として，教会形成の過程であり，それ故最終的には，神の国への旅行なのである。聖餐式に於ける感謝と喜びの性格は，本来，復活の喜びの集りとして甦りの主と逢い，主と共に神の国に入る事から来ている。こうして，聖餐式は，我々を奉献するという方向，即ち，神へと向う過程と，次には，聖別を転機としての逆の方向，神から人間へ，神御自身を我々の生命のために与えられる方向とをもつ。クリスチャンは更に「平安のうちに去るべし」との宣教へのつとめをうけて，更に世界へと向ってゆく。こうして，聖餐式は，その繰り返しによって，我々を漸次に，キリストの成員へとつくりかえてゆくのであり，最後に，聖餐のサクラメントは，終末的な意味における，パルウシアのサクラメントとして，キリストと共に，神の国にある様相をもつのである。リタージカル・ムーヴメントの主要な務めの一つは聖餐における，この終的意義を再発見する事にあるであろう。

最後に，インデアナポリス主教，ジョン・P・クレイン師父の，「聖餐による生活」と題する説教があるが，評する事を避けて，以上六つの収められた論文，或は講演を概括すると，本来，礼拝復興のための会議であるので，勿論，聖餐式中心の意義の昂揚に集中している。六つの主題はしかし乍ら，ある限られた時間や紙数の制限の中で語られるには，あまりに大きな課題と思われる。また，これは，聖公会の中で行なわれたリタージカル・ムーヴメントの会議であるから，第六のそれを除くと夫々の論文の背景に，聖餐式についての，聖公会としての歴史的な共通理解と，同時に亦問題とが前提されている事を忘れてはならない。私見をつけ加えるなら，第3及び第4の論文は，この書物の中で最も示唆に富むものと思う。　（関本　肇）

A. M. Stibbs, Sacrament, Sacrifice and Eucharist:
The Meaning, Function and Use of the Lord's Supper,
The Tyndale Press, London, 1961, 93 pp.

この本の題名より我々は著者が聖公会の人ではないか，と推論するものであるが，果してその通りである。スティブスはロンドンのオークヒル神学院の副校長である。この中で